

京都大学アカデミックデイ 2015

『研究者の本棚』ブックリスト

〈目次〉

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本	p. 2
B 今ハマっている本（誰かこの本について話したい）	p. 7
C 若者にお勧めしたい本	p. 10
D 自分の研究に関連して紹介したい本	p. 16
山極総長の推薦図書	p. 23

後援：京都大学生協同組合

協力：京都府立図書館、京都大学附属図書館

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

- ①推薦者のコメント
 - ②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」
-

『力学 増訂第3版-ランダウ=リフシッツ理論物理学教程』（レフ・ダヴィドヴィッチ・ランダウ エフゲニー・ミハロヴィッチ・リフシッツ 広重徹、東京図書）※

- ①有名なシリーズの第1弾。大学1年生のときは大学物理が難しすぎてもう無理だと挫折感を味わったが、気を取り直して2年生後半から1年ぐらいかけて頑張って読んだ本。難しかったがその分、物理学の面白さを垣間見れた。ランダウ&リフシッツのシリーズは他にも多数ある（もちろんもっと難しい）。
- ②潘晟（京都大学理学研究科）「No.1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『部分と全体』（ヴェルナー・カルル・ハイゼンベルク 山崎和夫、みすず書房）※

- ①哲学を勉強しているひとから勧められた一冊。ハイゼンベルクの自伝となっていて、偉大な物理学者たちの対話を垣間見ることができます。彼らがどんな景色を見て、なにを考えたのか、読むたびにあたらしい発見のある本です。読み応えはかなりのありますが、章ごとでも十分に読めると思います。
- ②潘晟（京都大学理学研究科）「No.1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『電子立国日本を育てた男-八木秀次と独創者たち』（松尾博志、文藝春秋）※

- ①理学部に在学していた時に読んだ分厚い本。研究ってなんて面白いんだろうと思いました。当時流行っていた「電子立国日本」の礎は、昭和の初めに活躍した八木秀次を初めとする研究者によって作られたという話。研究者が研究に命をかけている様子が感じられました。
- ②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No.3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『元素の小辞典』（高木仁三郎、岩波書店）

- ①個性豊かな100以上の元素をどのように組み合わせさせて使っていくか、それが化学の醍醐味。そんな元素達に纏わるエピソードをまとめた本です。小学生からでも手軽に化学を楽しめます。
- ②北川進（京都大学物質-細胞統合システム拠点）「No.4：ナノ空間の世界と化学」

『酵素反応解析の実際』（広海啓太郎、講談社）

- ①なし②滝田禎亮（京都大学農学研究科）「No.6：酵素反応はどこまで正確か？」

『耐熱合金のおはなし』（田中良平、日本規格協会）

- ①高温耐熱材料がいかにかCO2削減、省エネルギーに寄与しているか、どのようにして材料設計が行われているのかなどについて初心者にもわかりやすく書かれた本で、非常に感銘を受けた。
- ②乾晴行（京都大学工学研究科）「No.7：炎を制する-超耐熱構造材料」

『マヤ文字解説』（マイケル・D. コウ 武井摩利 徳江佐和子、創元社）※

- ①マヤ文字は長い間純粋な象形文字で解説は不可能と考えられてきました。しかし、ひらがなと漢字のように表音文字と表語文字と組み合わせであることが分かり、最近解説が一気に進みました。学会の常識を若き研究者たちの努力が覆す過程は圧倒されます。
- ②笠木雅史（京都大学文学研究科）「No.9：意図が先か、行為が先か」

『人道的介入-正義の武力行使はあるか』（最上敏樹、岩波書店）※

- ①大規模暴力に苦しむ人民のために、武力で介入することは正当化されるかという問題について、考えるきっかけとなった本。
- ②越智萌（京都大学法学研究科）「No.10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『クリティカル・シンキング練習帳』（M. ニール・ブラウン、PHP研究所）

- ①研究に必要な、批判的な見方の方法論について学べる本。常識や偏見にとらわれずに自分の意見を言うことなら、私にもできる、と思わせてくれた本。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大规模犯罪のその後」

『旅をする木』（星野道夫、文藝春秋）※

①氷たちが沈黙する雪原の真中で、一本の老木が静かに折れた。氷河に落ちた老木はそのゆるやかな流れに乗り、アラスカの凜とした景色の中をカリブーの群れやオーロラのゆらめきと交感しながら旅を続ける。アラスカに魅せられた写真家、星野道夫が描く動物、植物、そして人々の苦労と喜び。彼の真直ぐで物静かな語り口は、遙か彼方の雪原を私の心に浮かび上がらせ、フィールドでの暮らしへの憧れを強めた。（本郷）

②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『チンパンジーの政治学—猿の権力と性』（フランス・ド・ヴァール 西田利貞、産経新聞出版）※

①ドラマ『半沢直樹』は好きですか？人間だけでなく動物の社会にも、権力をめぐるドロドロした争いとドラマがある。動物園のチンパンジーだって、毎日社会の荒波にもまれ、必死に生きている。ドラマのてん末に衝撃を受けること間違いなし！人間も動物の一種であることを、この本が気付かせてくれた。（田島）

②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『シンボル形式の哲学』（エルンスト・カッシーラー 木田元、岩波書店）※

①哲学者カッシーラーによる古典的名著。言語、神話的思考、認識の現象学というテーマに沿って、膨大な資料を駆使しつつ、人間精神の構造と普遍性に迫っていきます。作者と壮大な人類史をめぐる旅に出ているような感覚にとらわれました。すべてを知りたいが、なかなかそれがかなわない人類学に、1つの理想型を提供してくれているように思います。

②高田明（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）「No. 14：教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」

『城砦』（アーチボルド・ジョーゼフ・クロニン 竹内道之助、三笠書房）※

①医者やって金儲けするするのも魅力的だけど、人生の最後に反省しようと思った→で、研究者になりました。

②松田道行（京都大学医学研究科）「No. 15：顕微鏡と数学で生命の謎に挑む」

『複雑系—科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち』（M. ミッチェル・ワールドロップ 田中三彦 遠山峻征、新潮社）

①2000年頃、何気なく購入して読んだこの本が、それまで自分が発見した不思議な化学現象が複雑系事象として理解できることを示唆してくれた。これにより、メカニズムの解明がおおいに進展した。

②田村類（京都大学人間・環境学研究科）「No. 16：磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『シリーズ生命倫理学 第17巻 医療制度・医療政策・医療経済』（今中雄一 大日康史 今中雄一、丸善出版）※

①なし②今中雄一（京都大学医学研究科）「No. 18：医療の質の地域格差を考えよう」

『現代倫理学入門』（加藤尚武、講談社）

①学部生のときに読んで倫理学を学ぶことにしました。現代の社会的問題を考える上で哲学が重要であることを教えてくれる本です。

②児玉聡（京都大学文学研究科）「No. 21：ゲノム編集の倫理について考える」

『沈黙の春』（レイチェル・カールソン著、青樹繁一訳、新潮社）※

①低リスクであり、便利で使いやすくと考えられていたものが、場合によっては、生体濃縮され、人間を含めた生態系に毒性をもたらす可能性を示唆した歴史的な名著。自分自身の研究の方向を考える参考になりました。

②佐藤文彦（京都大学生命科学研）「No. 22：ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」

『知的生活の方法』（渡部昇一、講談社）※

①渡部昇一氏の名著。知識人とはどのような人間なのか、そこに近づくにはどのような生活を送ったらよいかを教えてくださいましたのが本書です。その領域にはまだまだ程遠い私ですが、数々の悩みをやり過ごしながらも、研究と知識で飯を食う生活に憧れを持ち続けることができたのは、本書のおかげだったと今にして思います。絶版ですが、本書の続編「続・知的生活の方法」（講談社現代新書）の方が個人的には好きで、こちらは古書で現在も流通しています。

②薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『医学生』（南木佳士、文藝春秋）※

①著者が秋田大学医学部で実際に医学生だったころをモチーフにして書いたとされる名作中の名作。私は医学部を志

したことはありませんでしたが、今にして思えば、本書が医学のお手伝いをする「生体材料学」という分野を志すきっかけの一つだったように思います。エリート養成機関が舞台の話にしては実に泥臭く、切ないエピソードが満載です。人の命をあずかる仕事に就くことの大変さが、内臓をえぐられるかのようなリアルな文章で描かれています。

② 薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『青きドナウの乱痴気』（良知力、平凡社）※

① 1948年ウイーン革命は、教科書で習う歴史からこぼれおちたひとびとの革命でした。おんなたちも含まれます。おんなたちはなぜ銃をとらなければならなかったか。緻密な下調べのもと、誰もが十分楽しめるスリリングな社会史の本です。こんな本を書きたい！

② 茶園敏美（京都大学アジア研究教育ユニット）「No. 27：占領期二都物語京都・神戸の平和と人権」

『複合材料—強靱化の理論と応用』（アンソニー・ケリー 村上陽太郎、丸善出版）

① 材料どうしを組み合わせると元の材料以上の性能が得られる仕組みが書かれている。

② 大石毅一郎（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 33：元素戦略プロジェクト」

『ドラえもん（1～45）』（藤子・F・不二雄、小学館）※

① 振り返ってみると、科学へのあこがれは小さい時に読んだドラえもんが最初のような気がします。2112年のドラえもん完成までに、タケコプターは完成するのでしょうか？

② 増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使えよう」

『物理の散歩道』（ロゲルギスト、岩波書店）※

① 日常の事象をさまざまな角度から考えることの面白さがわかります。お勧めです。

② 増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使えよう」

『TRONを創る』（坂本健、共立出版）

① 企業に就職して、コンピュータ開発の夢を実現させている頃、アップルコンピュータのような統一感のある操作性を追求していました。MS-DOSマシンにBTRON仕様を実装した試作機も作っていました。技術立国日本と言われ、企業のコンピュータ開発は、大いなる夢と将来があった時代です。

② 江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『Introduction to Superconductivity』（Michael Tinkham, Dover Publications）

① 学部以上の知識を必要とするので推薦はしないが、今の仕事を選ぶきっかけになった本である。

② 市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『日常という名の鏡—ドキュメンタリー映画の界隈』（佐藤真、凱風社）※

① この本がきっかけで、映像を通して「日常」をみつめるとはどういうことか、考えるようになりました。今も繰り返し読み続けている本です。『阿賀に生きる』（映画）と一緒にぜひ手にとってみてください！

② 直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『森の回廊—ビルマ辺境民族開放区の1300日』（吉田敏浩、NHK出版）※

① ビルマの少数民族に興味を持ち始めるきっかけとなった本です。

② 直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『木簡・竹簡の語る中国古代：書記の文化史』（富谷至、岩波書店）※

① 中国古代の甲骨や青銅器など書写材料の変遷を論じ、特に漢代で行政文書で用いられた竹簡について簡明に論じられています。発表分担者は学部三回生の時にこの本を読み、中国古代史のうち、竹簡を史料として用いた研究を志し、今に至るまでその研究を続けています。発表分担者の研究・進路に最も大きな影響を与えた本の一つです。

② 平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『シルクロード糸綯之路 第3巻 幻の楼蘭・黒水城』（NHK出版）※

① 20世紀初頭、列強諸国は中央アジアにこぞって探検隊を派遣し、非常に多くの史料を収集するに至りました。発表分担者は中学時代にNHKのシルクロードシリーズを視聴したのですが、特に西夏の都市、黒水城の落城とそれにまつわる人物の悲哀を描いた回が印象的でした。問題点を指摘されることもあります。シルクロードロマンを描いたこの本は、中国史に興味を懐いた原点として紹介しておきたい本ではありません。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『学研の図鑑 宇宙 新訂版』（学研マーケティング）※

①宇宙すげー、ロケット格好良いなあ。小学校の理科の授業での太陽観測と合わせて、非常に刺激になった。天文ガイド（誠文堂新光社）を買うようになり、下手な天体写真を撮るようになった。

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『時空のさざ波—重力波を求めて』（坪野公夫、丸善出版）

①この本がきっかけで、大学院の入試の面接で重力波の話をしました。そのときは自分が重力波の研究をすることになるとは思ってもいなかったのですが。

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『ゴリラとピグミーの森』（伊谷純一郎、岩波書店）※

①日本の霊長類学の創始者のひとりである著者が、アフリカで実施したゴリラの現地調査を克明に描きつつ、同時にピグミーの人びととの交歓の日々とをあざやかに語った名著。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『MASTER KEATON完全版（1～12）』（浦沢直樹 勝鹿北星 長崎尚志、小学館）

①なし②宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 51：産学連携の原形」

『流れとよどみ—哲学断章』（大森荘蔵、産業図書）

①高校生のときにこの本を読んだことが、哲学を学びたいと考えるきっかけのひとつになりました。哲学的問題が日常生活の場で姿を現すさまが平易なことばで描き出されています。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『論理哲学論考』（ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン 野矢茂樹、岩波書店）※

①卒業論文でこの本について論じるなかで、より専門的に哲学を研究したいと考えるようになりました。思考可能性の限界についての鋭い洞察が独自のスタイルで凝縮されています。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『脳のなかの幽霊』（V. S. ラマチャンドラン サンドラ・ブレイクスリー 山下篤子、角川書店）※

①中枢神経の障害によって生じる奇妙で興味深い症状の実例を挙げつつ、脳の不思議について紹介・解説されている一冊です。著者自身が神経科学者でもあります。どちらかと言えば心理学的な切り口かつ平易な表現で書かれており、医学的な専門知識が無くとも楽しく読むことができると思います。

②上村紀仁（京都大学医学研究科）「No. 53：パーキンソン病をモデルする」

『宇宙からの帰還』（立花隆、中央公論新社）※

①小学生の自分にとって、ロボットが戦うSFアニメの世界でしかなかった宇宙という環境について、まったく異なる見方を与えてくれたことを強く覚えている。

②延原章平（京都大学情報学研究科）「No. 55：お魚モーションキャプチャ」

『モモ』（ミヒヤエル・エンデ 大島かおり、岩波書店）※

①時間とは何か、クロノスとカイロスの違い、など子供のころは子供なりに、大人になってからも改めて考えさせられる本。

②延原章平（京都大学情報学研究科）「No. 55：お魚モーションキャプチャ」

『海底2万マイル』（ジュール・ヴェルヌ 加藤まさし 高田勲、講談社）※

①未知の領域である海底世界を、リアルに描写された潜水艦で冒険するSF小説。後になって、約150年前に書かれた作品と知って驚いた。

②延原章平（京都大学情報学研究科）「No. 55：お魚モーションキャプチャ」

『利己的な遺伝子』（リチャード・ドーキンス 日高敏隆、紀伊国屋書店）※

①遺伝子の多様化（進化）と生物の進化を考えさせるわかりやすい読み物

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『神々の指紋 上』（グレーアム・ハンコック 大地舜、翔泳社）※

①その内容については批判もありますが、本書によりこれまでになく知的好奇心を掻き立てられたことを覚えています。本書を読んだ後、古代の文明、遺跡、神話、言語等に大きな関心を抱くようになり、古典文学の世界に足を踏み入れたような気がします。現在はサンスクリット美学と文法学を研究領域としていますが、将来的に世界の古代文明研究に何らかの形で携わりたいと考えています。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海一美の探訪」

『宇宙兄弟（1～26）』（小山宙哉、講談社）

①2014年にわたしの所属している学会で、JAXA 筑波宇宙センターに行って宇宙開発について学ぶ、という企画がありました。わたしはただ、大好きなこの漫画の舞台を見てみたいというミーハーな動機でそこに参加したのですが、それが縁でいま宇宙総合学研究ユニットという部署に勤め、「宇宙の哲学」などという途方もない研究テーマに挑戦することになりました。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『知的好奇心』（波多野誼余夫・稲垣佳世子、中央公論新社）※

①内発的動機づけについて解説した本。この本を高校時代において感銘を受けました。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさの心理学：思い出ときづな」

『愛の科学』（賀川豊彦）

①私たちの生きている「科学主義」時代に、美学的な人間性を訴える

②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『時代を超えた思想家賀川豊彦』（林啓介）

①読みやすい他、総括的

②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『脳を究める一脳研究最前線』（立花隆、朝日新聞出版）

①私が脳の研究を始めた約20年前の最先端の（まじめな）成果が、一般の読者向けにわかりやすく書かれています。最近の脳科学の本と比べてみると、この20年間の脳研究の進歩を知ることができるかもしれません。

②水原啓暁（京都大学情報学研究科）「No. 66：リズムでつながる脳」

『黒い虹—阪神大震災遺児たちの一年』（あしなが育英会編、廣済堂出版）※

①兵庫県南部地震の被害を目の当たりにしたことは、地震の研究をすることへの大きな同期づけになりました。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

『地震と断層の力学 第二版』（クリストファー・H. ショルツ 柳谷俊 中谷正生、古今書院）※

①英語版はゼミで必死に勉強した。自分の指導教員だった先生が思いを込めて翻訳している。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

B 今ハマっている本（誰かこの本について話したい）なった本

『書名』（著著名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

- ①推薦者のコメント
 - ②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」
-

『罪と罰』（フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー、新潮社）※

- ①文学部に文学（特にロシア文学）が大好きな友達がいる、彼が高校時代から絶賛おすすめしてきた本。最近、読み始めた。どぎつい印象とは違って意外と読みやすくてしかも面白い。
- ②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『ゼロ・トゥ・ワン-君はゼロから何を生み出せるか』（ピーター・ティール、NHK出版）※

- ①PayPalの創業者である著者が起業について書いた本。何に対しても、リスクを取って新しいことを始めなければならないという著者の姿勢は私たちに必要なことであるのは間違いないと思う。
- ②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『元素戦略—科学と産業に革命を起こす現代の錬金術』（中山智弘、ダイヤモンド社）※

- ①「材料を制する者が世界を制する。」元素を原子スケールでマニピュレートすることで、これまでになく素晴らしい材料をいかに作り上げるかを考えさせられる。
- ②乾晴行（京都大学工学研究科）「No. 7：炎を制する—超耐熱構造材料」

『ジェノサイド（上・下）』（高野和明、角川書店）※

- ①SF小説と思いきや、詳細な取材や参考文献の検討を通じて、コンゴの密林で繰り返られる児童兵をつかった虐殺やアメリカ軍による特殊作戦といった、世界の裏側を描いています。
- ②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大规模犯罪のその後」

『13 階段』（高野和明、講談社）※

- ①メインは死刑執行までに冤罪を暴くという推理小説ながら、現代日本が抱える死刑制度における諸問題や、保護司や保護観察の制度など、刑事司法の制度について学べる本。
- ②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大规模犯罪のその後」

『群れはなぜ同じ方向を目指すのか？：群知能と意思決定の科学』（レン・フィッシャー 松浦俊輔、白揚社）※

- ①群れることで、生物はひとりではできないことも成し遂げられる。「大群イナゴの長距離移動を可能にする単純なルール」「アリの最短ルート発見メカニズム」から、「多数派が正しくなる条件」「スタジアム内で火事に巻き込まれた時に取るべき行動」「100人の候補者から優れた社員を面接で選ぶには？」まで、人間を含めた様々な生物がいかに集団の力を用い、また用いるべきなのかについてのエキサイティングな良書。（本郷）
- ②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『贈与論』（マルセル・モース 吉田禎吾 江川純一、筑摩書房）

- ①誰かに「プレゼント」をおくったり、もらったりした経験は誰にでもあるだろう。モースは膨大な文献を調べ、文化によらず人類社会には「贈り物」にまつわる共通点を発見し、背後で人を動かしている制度や原則をあぶり出した。私たちは、チンパンジーやゴリラ、オランウータンによる食物分配の研究を通して、人類の贈与の特徴について考えている。（田島）
- ②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『私とは何か「個人」から「分人」へ』（平野啓一郎、講談社）※

- ①人間は「individual=それ以上分けられない存在」と言われますが、矛盾に満ちています。私はそれが人間の幅を作っていると思っているのですが、「一貫しないことが同一人物の中に共存している」ことは、よくないことであり非難の対象になることもあります。なんか変だよなあと思っていたところ、平野さんは「10人の人と対応するとき、10通りの自分がいて、個人はその集合体である」と考えたそうで、思わず膝を打ちました。
- ②児玉聡（京都大学文学研究科）「No. 21：ゲノム編集の倫理について考える」

『世界で一番美しい元素図鑑』(セオドア・グレイ ニック・マン 武井摩利、創元社) ※

①TBS「マツコの知らない世界」でも取り上げられた、いま話題の一冊です。化学とは、物質の中身がどうなっているのかを学び、さらにそれを新しく生み出すための学問です。しかし高等教育では、実際の物質を見たりする機会がほとんどないまま、元素記号や化学式だけを頭に詰め込んで「化学を経験した」ことにしています。皆さんはカルシウムを実際に見たことはありますか？ネオンはなぜランプに使われているかご存知ですか？そのような諸々の欲求に、本書は膨大な数の写真を用いてわかりやすく答えてくれます。インテリアとしてもおすすめ。

②藪塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25:骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『升田幸三の孤独』(河口俊彦、マイナビ) ※

①最近、将棋を指さずに観て楽しむ「観る将」と呼ばれる将棋ファンが、若い女性を中心に増えています。河口俊彦八段は将棋界きっての文筆家として長年活躍していました(2015年1月逝去)。本書は小説新潮に連載されたエッセイをまとめたもので、大山・中原・谷川・羽生といった棋界のスーパースターに焦点をあてたものではなく、覇道を歩んだ異能派の棋士や、才能は認められながらもトップに立てなかった棋士の悲哀などに焦点が当てられており、興味深い一冊となっています。

②藪塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25:骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『あな』(谷川俊太郎(著)、和田誠(イラスト)、福音館書店) ※

①この絵本に出てくる主人公の男の子が、なんだかとても研究者っぽいな、と思いながら読みました。出展代表者の水町より。

②水町衣里(京都大学物質-細胞統合システム拠点)「No. 37:いい対話ってどんな対話？」

『差異とつながりの民族誌—北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー』(速水洋子、世界思想社) ※

①研究の際に調査対象者を「見知らぬ他者」としてではなく、自分自身の日常の生の実践とのつながりを見出しながら理解することの大切さをこの本から教えてもらいました。

②直井里予(京都大学東南アジア研究所)「No. 42:映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『民族を読む—20世紀のアボリア』(徐京植、日本エディタースクール出版部)

①「祖国というのは人間の生き方の態度のことなのだ」という著者の言葉が響きます。

②直井里予(京都大学東南アジア研究所)「No. 42:映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『支那の体臭』(後藤朝太郎、バジリコ)

①戦前の日本で、中国の大衆文化に興味を持ち、中国大陸津々浦々を旅してまわった一人の研究者がいました。中国の銭湯体験、尼寺での接待、中国宿での宿泊などなど、一般の旅行者ではとても回れないようなマイナーな場所を次々と紹介してくれています。それも、学術研究などという固い視点ではなく、著者が自分の興味と好奇心を原動力に書いているためか、非常に読みやすいです。

②平松明日香(京都大学文学研究科)「No. 43:三国時代前夜:後漢王朝崩壊に至る過程」

『双書哲学塾 共生から』(川本隆史、岩波書店)

①ケア、教育、臨床、エコロジーなどの問題群をとりあげて、人間が共生するとはいかなる事態であるのかという哲学的課題を、倫理学の立場から平易な言葉で説きおこしています。

②太田至(京都大学)「No. 50:アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『あるようにあり、なるようになる—運命論の運命』(入不二基義、講談社)

①「すべてのことは必然的に起こっている」という主張(運命論)のまったく新たな姿を浮かび上がらせようとする本です。きわめて強靱でスリリングな思考の展開を味わうことができます。

②北村直彰(京都大学文学研究科)「No. 52:哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『うんこがへんないきもの』(早川いくを てらにしあきら、角川書店)

①かねてから「動物の珍しい生態を擬人化したら面白いのではないか？」とっていたら、この本が既にやっていました。

②飯田敦夫(京都大学再生医科学研究科)「No. 57:赤ちゃんを産む!魅惑の胎生魚ワールド」

『はたらく細胞』(清水茜、講談社)

①細胞を擬人化して、からだの仕組み（1巻は免疫系）を描写しています。1巻は血球や免疫系の比較的「よく動く」細胞が登場しましたが、他の「動かない」細胞が登場するであろう続刊の描写にも大いに期待しています。

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 57：赤ちゃんを産む！魅惑の胎生魚ワールド」

『インダス—南アジア基層世界を探る』（長田俊樹編、京都大学学術出版会）※

①読み始めたばかりなので語弊があるかもしれませんが、多くの謎を残すインダス文明について、多様な視点からの最新の研究成果が集約されたものと考えます。昔から古代文明に興味があった私にはたまらない一書です。日本語で読めることに感謝します。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海—美の探訪」

『今世紀で人類は終わる？』（マーティン・リース 堀千恵子、草思社）

①終わっちゃうかもしれないらしいです。大変だ。宇宙物理学者が書いた本なのですが、21世紀の人類に襲いかかる（かもしれない）カタストロフについて、とてもわかりやすく解説しています。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『パンダが来た道—一人と歩んだ150年』（ヘンリー・ニコルズ 池村千秋 遠藤秀紀、白水社）※

①研究とは（今のところ）関係ありませんが、最近読んで面白かった本です。パンダというのんきな動物が人間の都合に翻弄されてきた経緯を、パンダの生息地である中国の浮沈や保護活動の歴史・現状と合わせて解説しています。はたしてパンダは哲学のテーマになるのでしょうか？宇宙の哲学が一段落したら（いつになるやら……）、ぜひ考えてみたいです。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『天人五衰 改版 豊饒の海 第4巻』（三島由紀夫、新潮社）

①輪廻転生をテーマにした緻密な構成と文体の物語の中で、なつかしさ、デジャビュが描かれています。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさの心理学：思い出ときづな」

『英知の教育』（Jクリシュナムルティ、春秋社）

①なし②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『わたしは「いま、この瞬間」を大切に生きています』（エックハルト・トール、徳間書店）

①非常に現実的・進歩的なアドバイス

②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『日本の地震予知研究130年史 明治期から東日本大震災まで』（泊次郎、東京大学出版会）※

①分厚いけれど、各時代の背景や、研究の方向性の変更が結局は繰り返しているという指摘が鋭い。（服装の流行なども似てるかも。）

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

C 若者にお勧めしたい本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

- ①推薦者のコメント
 - ②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」
-

『イシューからはじめよ—知的生産の「シンプルな本質」』（安宅和人、英治出版）※

- ①この本で言っていることはどんな分野・仕事でも使える（使うべき）ことだと思う。研究者志望でもバリバリの商社マン志望でも読むと良いと思う。著者は有名なマッキンゼー出身。
- ②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『ふたりの微積分—数学をめぐる文通からぼくが人生について学んだこと』（ステイーヴン・ストロガッツ、岩波書店）

- ①非線形現象の解析に関して世界的に有名な数学者が高校時代に教わった数学の先生との30年に渡る文通内容、同時に進んでいく彼自身の心の動きについて赤裸々に語った書。ひょっとしたら自分も高校時代の恩師と今まで文通を続けていて、そうすると今の仕事も変わっていたかもしれない、と思わせるところが青春小説である。
- ②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『ロバート・オッペンハイマー —愚者としての科学者』（藤永茂、朝日新聞出版）

- ①オッペンハイマーは非常に優秀な若者であって、恵まれた研究者としてのキャリアを積んでいった。人類最大のプロジェクト、マンハッタン計画の中心人物となったオッペンハイマーの葛藤は科学の最前線で生きる私たちも少しは感じるところです。
- ②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『化学物質はなぜ嫌われるのか』（佐藤健太郎、技術評論社）

- ①科学には負の側面が付き物ではあるが、時として根拠のない偏見により強調されがちである。科学技術の恩恵とリスクに対してどのように向き合っていくべきか、本書ではそうした負の側面の代表格と言える「化学物質」に焦点を当てて分かりやすく解説している。
- ②北川進（京都大学物質—細胞統合システム拠点）「No. 4：ナノ空間の世界と化学」

『航空の世紀』（吉川康夫、技報堂出版）

- ①航空機における耐熱材料の重要性を系統的に理解するのに最適の書。
- ②乾晴行（京都大学工学研究科）「No. 7：炎を制する—超耐熱構造材料」

『復讐と赦しのあいだ—ジェノサイドと大規模暴力の後で歴史と向き合う』（マーサ・ミノウ、信山社出版）

- ①悲惨な大規模犯罪の、被害者を癒す本当に有効な方法とは何かについて考える、インスピレーションを与えてくれる本。
- ②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『なぜ、世界はルワンダを救えなかったのか—PKO司令官の手記』（ロメオ・ダレール、風行社）※

- ①ルワンダのジェノサイドに介入したPKO司令官が見た現実を伝えてくれる本。
- ②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『宇宙は何でできているのか—素粒子物理学で解く宇宙の謎』（村山斉、幻冬舎）※

- ①ベストセラーになった基礎物理学の啓蒙書。少し難しいところもありますが、これを読めば科学雑誌の素粒子・宇宙物理関係の記事が楽しく読めるようになるのでは。
- ②杉山和彦（京都大学工学研究科）「No. 11：基礎物理学を目指す単一イオン光時計」

『理系の子 高校生科学オリンピックの青春』（ジュディ・ダットン 横山啓明、文藝春秋）※

- ①少し前に読んで印象に残った本で、元気が出ます。アメリカの陽の部分も感じられます。若い人だけでなく、とくに教育に携わっている方にも。
- ②杉山和彦（京都大学工学研究科）「No. 11：基礎物理学を目指す単一イオン光時計」

『野生動物の行動観察法—実践 日本の哺乳類学』（井上英治・中川尚史・南正人、東京大学出版会）※

①野生動物の行動観察のハウツー本。動物園や野猿公苑などで、この本を片手にいかに動物の行動を観察し、いかに記録していくかを、試してもらいたい。(中川)

②中川尚史(京都大学理学研究科)「No. 13: 映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『日本のサル学のあした—霊長類研究という「人間学」の可能性』(中川尚史・友永雅己・山極寿一、京都通信社) ※

①日本のサル学の明日を担う様々な領域の若手研究者(大学院生から30歳前半の助教の先生)が、自らの研究について、その内容のみならず、研究を始めたきっかけや苦労話まで論文には書けない、書かない内容を、サル学の「あさって」をになってくれる高校生、大学学部生向けに紹介した本。(中川)

②中川尚史(京都大学理学研究科)「No. 13: 映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『野生のオランウータンを追いかけて—マレーシアに生きる世界最大の樹上生活者 フィールドの生物学 11』(金森朝子、東海大学出版部) ※

①「野生のオランウータンを研究したい」日本に先人がいないゼロの状態から、夢をカタチにした研究者のこれまでの歩み。苦労話だけではなく、自分で決めた夢を、自分の力で実現する喜びを感じとることができる。扉を開ける勇気をもたらえる一冊。(田島)

②中川尚史(京都大学理学研究科)「No. 13: 映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『スティル・ライフ』(池澤夏樹、中央公論新社) ※

①世界に対するみずみずしい感動とそれについてのクールな観察眼が同居しています。

②高田明(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)「No. 14: 教えること、学ぶこと: 人類学の挑戦」

『A Wizard of Earthsea』(Ursula K. Le Guin, HMH Books for Young Readers)

①英語の原著にトライしてみたい人は、わかりやすいストーリーの本から始めるのがいいと思います。いまさら子供向けの本なんか読めるかという知識層も英語ならプライドが保てる。この本に出てくる魔法使いは科学者のことだと勝手に思ってます。自戒を込めて何回も読みました。

②松田道行(京都大学医学研究科)「No. 15: 顕微鏡と数学で生命の謎に挑む」

『「複雑系」とは何か』(吉永良正、講談社) ※

①複雑系に関する入門書である。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『宇宙が始まる前には何があったのか?』(ローレンス・M. クラウス 青木薫、文藝春秋) ※

①ビッグバンや物質と反物質の対称性について平易に解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『キラル化学—その起源から最新のキラル材料研究まで』(日本化学会、化学同人)

①今日のキラル化学に関する最先端の研究を平易に解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『自己組織化と進化の論理—宇宙を貫く複雑系の法則』(スチュアート・カウフマン 米沢富美子 森弘之、筑摩書房)

①非平衡自己組織化の観点から、生命の起源・生物進化・経済システム・民主主義の誕生を解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『幹細胞研究ってなんだ』(佐藤恵子 鈴木美香、文学研究科のHPにて無料ダウンロード可)

①ES細胞やiPS細胞などの多能性幹細胞は、医療や創薬の役に立つとして期待が寄せられています。しかし同時に、「永遠の命を目指すのか」などさまざまな問題もあり、一人ひとりが考える必要があります。本書は、女子大生と研究者の会話を通じて、技術を解説し、問題点と考える道筋を示したもので、京大文学研究科のHPに気前よく無料でダウンロードできるように掲載しておりますので、是非アクセスしてください。

<<http://www.cape.bun.kyoto-u.ac.jp/project/project02/>>

②児玉聡(京都大学文学研究科)「No. 21: ゲノム編集の倫理について考える」

『有機農業と遺伝子組換え食品 明日の食卓』(パメラ・C. ロナルド ラウル・W. アダムシャ 椎名隆、丸善出版)

※

①有機農業と遺伝子組換え作物は相容れないとおもっていませんか? 実際には、それぞれの専門家(夫婦)が持続的な

農業のありかたについて、実践を交えながら執筆した本の翻訳です。ちょっと前の出版ですが、是非読んで欲しい本です。

②佐藤文彦（京都大学生命科学研）「No. 22：ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」

『青春論 改版』（亀井勝一郎、角川書店）

①亀井勝一郎は、戦後の文壇において小林秀雄と並び称された代表的な評論家でした。しかし近年は著作の大部分が絶版となっており、その存在が黙殺に近い形で忘れ去られてしまっています。本書は現代人が軽視しがちな他者への思いやり、はにかみ、羞恥心を持つことの大切さを、著者独特のわかりやすい文章で説いています。ともすると理想主義的にうつる面もありますが、それがかえって新鮮な読後感を残します。心の空気を入れ替えるのに最適な書。

②薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『草枕／二百十日 改版』（夏目漱石、角川書店）※

①「草枕」と「二百十日」という、あまり教科書には取り上げられない作品を組み合わせた一冊。この組み合わせが大変素晴らしい。私はこの2作を音声で聴くのも好きです。「草枕」については日高徹郎氏がWeb上で公開している朗読が、作中の「余」が日高氏に乗り移ったかのように素晴らしく、夜に聴いているとどこかに連れて行かれます。「二百十日」については、名優・橋爪功氏の朗読CDが新潮社より発売されており、作中の圭さんと碌さんの落語のような掛け合いが橋爪氏の絶妙な表現力で再現され、絶品です。

②薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『緑のダムの科学—減災・森林・水循環』（蔵治光一郎 保屋野初子、築地書館）※

①森林が洪水緩和に及ぼす影響には強い社会的な関心があるが、人工の防災構造物とどのような違いがあるのかは理解されていない。本書には、多様な意見が収録されているが、すべて読んで、あなた自身の「緑のダム」に関する見解を見いだしてほしい。

②谷誠（京都大学農学研究科）「No. 29：水と環境をまもる森の働き」

『森林飽和—国土の変貌を考える』（太田猛彦、NHKブックス）※

①最近里山が荒れているとよく言われるが、木材や薪炭に暮らしを依存していた数十年前までは、むしろ森林はたいへん貧弱で土砂災害も多かった。この歴史を本書によって学んだうえで、森林や林業の今後を考えてゆきたい。

②谷誠（京都大学農学研究科）「No. 29：水と環境をまもる森の働き」

『虚数の情緒—中学生からの全方位独学法』（吉田武、東海大学出版部）※

①考える力を持った人を鍛え上げたいと言う著者の情熱がほとぼしる逸品です。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使えよう」

『中学や高校の歴史の教科書・資料集・用語集』

①外国人さんと話すときに、自国の歴史や文化・その人の国や周辺国の歴史や文化を知っていると話が弾みます。理系文系関わらず、外国人さんと関わるならば、お勧めです。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使えよう」

『女性研究者とワークライフバランス—キャリアを積むことと、家族を持つこと』（仲真紀子 久保（川合）南海子、新曜社）※

①育児休業中にこの本に出会いました。ワークライフバランスと一言と言ってもバランスの取り方は人それぞれ。「こうしなければならない」と思い込まずに、自分に合った方法を試行錯誤しながら見つけるのが大事なんだな。と思いました。女性だけじゃなくて、男性にも眺めて欲しい本です。出展代表者の水町より。

②水町衣里（京都大学物質—細胞統合システム拠点）「No. 37：いい対話ってどんな対話？」

『科学技術Xの謎—天文・医療・文化財あらゆるものの姿をあらわすX線にせまる』（塩瀬隆之 元木環 水町衣里、化学同人）※

①多様な分野の研究者と筆者たちとで、じっくり対話を重ねてつくった本です。きれいな写真もたくさん載っています。出展メンバーの水町&元木より。

②水町衣里（京都大学物質—細胞統合システム拠点）「No. 37：いい対話ってどんな対話？」

『スーパーエンジニアへの道—技術リーダーシップの人間学』（ジェラルド・M. ワインバーグ 木村泉、共立出版）

①プログラマーとして、エンジニアとして、働くことは、物作り屋のプライドであります。夢を形にして、製品として、この世に登場させることができるからです。しかし、この幸福を持続するには、やはり、リーダーとなり、この幸福な時間が、長く続くように開拓し、組織を守ることが必要です。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『世界で一番美しい元素図鑑』（セオドア・グレイ ニック・マン 武井摩利、創元社）

①単に見ているだけでは味気ない面もある元素周期表であるが、本書では写真が多く使われているのでより具体的なイメージを持つことができる。

②市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『Newton 別冊 完全図解周期表』（玉尾皓平 桜井弘（薬学） 福山秀敏、ニュートンプレス）

①上記の書籍（『世界で一番美しい元素図鑑』）よりも少しだけ説明が豊富であり表現が自然である。

②市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『理科系の作文技術』（木下是雄、中央公論新社）※

①「理系だから国語は苦手でもいいし文章は下手でもいい」と考えているとしたら、この本をはじめとした「論文の書き方」の書籍を早い段階で一読しておくことをお勧めする。

②市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『ガリア戦記 改版』（ガイウス・ユリウス・カエサル 近山金次、岩波書店）※

①古典の中には、普遍的なことがいくつも記されています。カエサルの率いるローマ軍のガリア遠征の記録から現代を見つめてみてください。フィールドワークの調査手法の参考にも！

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『社会の喪失—現代日本をめぐる対話』（市村弘正、杉田敦、中央公論新社）※

①「葉害、戦争、国家、境界、国境、難民、差別、原発、冤罪」などの問題にどう向きあっていかなければならないか、たくさんのヒントを与えてくれる本。

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『中国史 上、下』（宮崎市定、岩波書店）※

①これから中国史を学ぶ若者のために書かれた概説書です。中国史を古代・中世・近世・最近世（近代）と四つの時代に区分し、各時代の特徴を鋭く描き出しています。中国史の全時代を研究し、大きな業績を残した宮崎博士にしか書くことのできない不朽の中国通史の概説書だと思います。冒頭の時代区分に関する説明は、中国史のみならず、日本史・西洋史にもその範囲が及び、歴史学に興味を持つ人に第一に読むのを勧められる本です。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『クビライの挑戦：モンゴルによる世界史の大転回』（杉山正明、講談社）

①世界史の授業で、モンゴルは残虐非道で非文明的な帝国であったと教わりました。しかし、杉山先生の本を読んで、モンゴル帝国に対する印象が鮮やかに一変したことを覚えています。杉山先生は、モンゴル帝国について、数多くの著作を書かれていますが、その中でもここでは、特に入手しやすく、また先生から直接もらったという縁で個人的に思い入れのあるこの本を推薦致します。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『科举—中国の試験地獄』（宮崎市定、中央公論新社）※

①歴代の中国王朝で、最も重要な制度の一つが、役人を選抜するための制度、つまり官吏登用制度です。中国では、千年以上にわたって、科举と呼ばれる筆記試験によって、役人を選抜してきました。科举は、王朝の運営に必要な役人を選抜するだけでなく、受験者側もまた一族の繁栄、免税特権獲得の為に熱心に受験しました。宮崎博士は、中国の受験地獄を招いた科举制度の実態を鮮やかに描き出しています。中国史に興味のある皆様にお勧めです。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『理系のための独創的発想法』（ア・ベ・ミグダル著、長田好弘訳、東京図書）※

①「科学における創造の動機」、「どのように科学的探究を行えばよいのか」などの項目を通じて、科学者にとって独創性・創造性が如何に重要で、それを育むにはどうすればよいかについて、わかりやすくかつ興味深く書かれていま

す。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『研究と独創性』（学術月報編集委員会、日本学術振興会）

①独創的研究とは何かについて、ノーベル賞・フィールズ賞受賞者を含む多くの研究者の意見をまとめています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『On the Electrodynamics of Moving Bodies, Albert Einstein』

①本ではなく論文（原論分の英訳版）だが、こんな風に新しい理論が作られるのか！と感動する。

<<http://www.fourmilab.ch/etexts/einstein/specrel/www/>>

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『アフリカ社会を学ぶ人のために』（松田素二、世界思想社）※

①アフリカ社会に関心のあるすべての方におすすしめします。アフリカの現実を伝えるとともに、そこからわたしたちが何を学ぶことができるのかを、フィールドワークの名人たちが語った本です。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『ルポ 資源大陸アフリカ—暴力が結ぶ貧困と繁栄—』（白戸圭一、朝日新聞出版）※

①現代アフリカの暴力とは何か。著者は現地特派員としての経験を生かしながら、資源開発をめぐる先進国とアフリカとの関係を、平易なことばで解き明かしています。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『哲学ってどんなこと？—とっても短い哲学入門』（トマス・ネーゲル（著）、岡本裕一郎・若松良樹（共訳）、昭和堂）

※

①哲学の学説を紹介するのではなく、じっさいに「哲学する」ことによって書かれた古典的入門書です。心、自由、人生の意味といったさまざまなトピックを通じて、哲学的に考えるとはどういうことかを知ることができます。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『子どものための哲学対話—人間は遊ぶために生きている！』（永井均、講談社）

①猫と少年が織りなす対話によって、人生と世界の根本に関わる問いの数々へと導かれます。書かれた対話の続きを身近な人と（あるいは自分自身と）してみたくなるはずです。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『二重らせん』（ジェームズ・デューイ・ウォトソン 江上不二夫 中村桂子（生命誌）、講談社）※

①1962年にノーベル生理学・医学賞を受賞したジェームズ・ワトソンが、DNAの二重らせん構造を解明するまでの軌跡、研究者達の情熱や野心などを、著者の回想により生々しく描写されています。二重らせん構造解明の決定打となる、X線結晶解析を行っていたロザリンド・フランクリンの立場に立った「ロザリンド・フランクリンとDNA」も併せて読む事をお勧めします。

②上村紀仁（京都大学医学研究科）「No. 53：パーキンソン病をモデルする」

『Newton 2015年3月号』（ニュートンプレス）

①身の周りにあふれる“色”と眼で感じる“光”との関係をカラフルに解説

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『サンスクリット』（ピエール・シルヴァン・フィリオザ 竹内信夫、白水社）※

①古代から現代に至るまでのサンスクリット語の歴史がまとめられています。サンスクリット語の性格、社会における位置づけ、同語がインド文化発展に果たした役割等を知るのに有用かと思います。サンスクリット語やサンスクリット文化に興味がある方には一読をお勧めします。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海一美の探訪」

『私たちはどう生きるべきか』（ピーター・シンガー 山内友三郎 奥野満里子、筑摩書房）※

①倫理学という学問に入っていくのにはいい本だと思います。著者のシンガーは、特に動物倫理学の分野の代表的理論家です。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『祈りの海』(グレッグ・イーガン 山岸真、早川書房)

①人気 SF 作家の第 1 短編集です。表題作が好きです。〈人生の意味〉や〈科学と宗教〉といったディープな哲学的問題を扱った、感動的な作品です。

②呉羽真(京都大学宇宙総合学研究ユニット)「No. 61: ひととは宇宙へ飛び立つべきか？」

『しあわせの理由』(グレッグ・イーガン 山岸真、早川書房)

①人気 SF 作家の第 2 短編集です。こちらも表題作が好きです。〈テクノロジーと幸福〉という哲学的な問題を扱って、いろいろ考えさせてくれます。

②呉羽真(京都大学宇宙総合学研究ユニット)「No. 61: ひととは宇宙へ飛び立つべきか？」

『若き数学者のアメリカ 改版』(藤原正彦、新潮社) ※

①海外で研究したくなる本です。

②楠見孝(京都大学教育学研究科)「No. 62: なつかしさの心理学: 思い出ときづな」

『学問の創造』(福井謙一、朝日新聞出版) ※

①日本人としてはじめてノーベル化学賞を受賞した京大の福井謙一先生の、新しい学問創造の意気込みを読み取りたい。

②諸熊奎治(京都大学)「No. 63: コンピュータで化学反応の世界を探る」

『ノーベル賞の周辺—福井謙一博士と京都大学の自由な学風』(米沢貞次郎 永田親義、化学同人)

①ノーベル賞受賞者福井謙一博士の共同研究者が、京都大学の自由な学風を振り返る。

②諸熊奎治(京都大学)「No. 63: コンピュータで化学反応の世界を探る」

『脳科学の教科書 ころ編』(理化学研究所脳科学総合研究センター、岩波書店) ※

①最新の脳科学の研究成果にもとづき、国内最大の脳研究拠点である理化学研究所脳科学総合研究センターが、中学生・高校生を対象とした「脳科学の教科書」を出版しています。少し難しい記述もあるかもしれませんが、基礎的で必須な脳科学の知識を習得できると思います。さらに深く学びたい場合には「脳科学の教科書 神経編」(理化学研究所脳科学総合研究センター、岩波ジュニア新書)もあわせて読むと良いと思います。

②水原啓暁(京都大学情報学研究科)「No. 66: リズムでつながる脳」

『岩波ジュニア科学講座〈第 8 巻〉変動する地球』(斎藤靖二(著)、綱川秀夫(著)、岩波書店) ※

①地球科学の全体をざっくり学ぶのによいと思います。

②加納靖之(京都大学防災研究所)「No. 67: 歴史にまなぶ大地震」

『科学はどこまでいくのか』(池田清彦、筑摩書房)

①なし②加納靖之(京都大学防災研究所)「No. 67: 歴史にまなぶ大地震」

D 自分の研究に関連して紹介したい本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

- ①推薦者のコメント
 - ②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」
-

『強い力と弱い力ーヒッグス粒子が宇宙にかけた魔法を解く』（大栗博司、幻冬舎）

- ①素粒子物理学のここ 100 年ぐらいの歴史をわかりやすくまとめた良書。著者は有名な理論物理学者で、簡単に説明しているが間違ったことはもちろん言わない。この業界のロマンを感じれると思う。
- ②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『人物で語る物理学(上)』（米沢富美子、岩波書店）

- ①アリストテレスの時代からの物理学の歴史を、その発展に貢献してきた人物にスポットを当てて紹介している。自分の勉強している分野がかくも多くの人びとのドラマの上になり立っていることを思うと感動を禁じ得ない。
- ②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『SYNCーなぜ自然はシンクロしたがるのか』（スティーヴン・ストロガッツ、早川書房）※

- ①全く違うように見える電子もホタルも細胞もみんな同じ、タイミングを合わせて驚くべき現象を示す。著者は数理学の専門家なのですが、多様性のなかにある普遍性を見出すという物性物理の神髄感を感じました。
- ②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『新しい物性物理』（伊達宗行、講談社）

- ①複雑な物性物理を小気味よく説明してくれる図書。同じ著者によって 1986 年に刊行された「物性物理の世界」の方がより平易に書かれているが、やや古いか。私は古い方を読んで物性物理を研究しようと思いました。
- ②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『集積型金属錯体』（北川進、講談社）※

- ①ナノ空間は単なる小さな空間ではなく、設計により特異な構造と機能を発現させることが出来る。ナノ空間を創生するための代表的手法である集積型金属錯体を設計・構築するための基礎理論・実例を解説した研究者向けのバイブルです。
- ②北川進（京都大学物質－細胞統合システム拠点）「No. 4：ナノ空間の世界と化学」

『革新的な多孔質材料ー空間をもつ機能性物質の創成 CSJ Current Review 03』（日本化学会、化学同人）

- ①ナノ空間の化学の研究トレンドを基礎から先端研究まで広く紹介しています。この分野の入門として最適な一冊です。
- ②北川進（京都大学物質－細胞統合システム拠点）「No. 4：ナノ空間の世界と化学」

『金属間化合物入門ー材料学シリーズ』（山口正治 乾晴行 伊藤和博、内田老鶴圃）※

- ①耐熱材料の中のエース、金属間化合物について平易に述べられている。
- ②乾晴行（京都大学工学研究科）「No. 7：炎を制するー超耐熱構造材料」

『ファスト&スロー（上・下）』（ダニエル・カーネマン 村井章子、早川書房）※

- ①人間は合理的に自分の行動を決めているのでしょうか。そもそも合理的に決定するということは、どういうことなのでしょう。この問題に取り組み、ノーベル賞を受賞した研究者が、自分の研究を分かりやすく紹介しています。
- ②笠木雅史（京都大学文学研究科）「No. 9：意図が先か、行為が先か」

『国際人権・刑事法概論』（尾崎久仁子、信山社出版）

- ①近年の国際人権法と刑事法の諸問題について、わかりやすく紹介しています。
- ②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『戦争犯罪とは何か』（藤田久一、岩波書店）※

- ①東京裁判、ニュルンベルク裁判から、近年に至るまで、武力紛争において行われる非人道的行為を犯罪としてきた過程について知れる本。
- ②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『1秒って誰が決めるの？一日時計から光格子時計まで』（安田正美、筑摩書房）

- ①時計や時間計測の歴史から最先端の研究まで、様々なエピソードとともに楽しく読めます。
- ②杉山和彦（京都大学工学研究科）「No. 11：基礎物理学を目指す単一イオン光時計」

『サバンナを駆けるサル—パタスモンキーの生態と社会』（中川尚史、京都大学学術出版会）※

- ①1986年から1997年までの間、アフリカ・カメルーンのサバンナに住む世界最速で走るサルを対象に行った生態研究の紹介本。いかにサバンナに適応したサルであるかがよくわかる。（中川）
- ②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『いのちはどう生まれ、育つのか：医療、福祉、文化と子ども』（道信良子、岩波書店）※

- ①さまざまな環境に生きる子どもと、「いのち」について見つめ直します。
- ②高田明（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）「No. 14：教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」

『The cultural and ecological foundations of lifeworld among the !Xun of north-central Namibi』（Takada, A, Trans Pacific Pr）

- ①サン（ブッシュマン）は、現代に生きる狩猟採集民、南部アフリカの政治・経済・歴史の周縁に追いやられてきた人々、その存在と権利の承認を求めて闘う先住民といった描かれ方の間でゆれてきた。ナミビアに住むクン・サンのライフストーリーにもとづいて、そうした研究史を再考し、新たなサンの像を探る。
- ②高田明（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）「No. 14：教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」

『対称性—レーダーマンが語る量子から宇宙まで』（リーオン・M. レーダーマン クリストファー・T. ヒル 小林茂樹、白揚社）※

- ①複雑系の真髄である相転移とそれに伴って発現する対称性の破れについて平易に解説している。
- ②田村類（京都大学人間・環境学研究科）「No. 16：磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『無の科学—ゼロの発見からストリング理論まで』（K. C. コール 大貫昌子、白揚社）※

- ①宇宙の起源とも密接に関連する「無」について科学的立場から平易に解説している。
- ②田村類（京都大学人間・環境学研究科）「No. 16：磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『無の本—ゼロ、真空、宇宙の起源』（ジョン・D. バロー 小野木明恵、青土社）※

- ①「無」について、科学・神学・哲学・文学の各立場から解説している。
- ②田村類（京都大学人間・環境学研究科）「No. 16：磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『「病院」の教科書—知っておきたい組織と機能』（今中雄一、医学書院）

- ①なし②今中雄一（京都大学医学研究科）「No. 18：医療の質の地域格差を考えよう」

『マンガで学ぶ生命倫理—わたしたちに課せられた「いのち」の宿題』（児玉聡 なつたか、化学同人）

- ①再生医療や脳死臓器移植や、「夢の医療」などと報道されるけど、そんなにバラ色なの？そもそも、脳死ってなんだっけ？生き死にの問題は、身近なことであり自分で考えなくてはならないのですが、難しいし辛気くさいし、ハードルが高いですね。この本は、女子高生の日常を軸にして、脳死や生殖医療、クローン技術など、生命倫理の問題を学びつつ、考えられるように工夫されています。是非手にとってみてください。
- ②児玉聡（京都大学文学研究科）「No. 21：ゲノム編集の倫理について考える」

『医師の一分』（里見清一、新潮社）※

- ①人工呼吸器や胃ろうなど生命維持装置が開発されたことはよいことではありますが、多臓器不全の高齢者につけられて、ただ死が先延ばしにされている状況も生むようになりました。この状況は、誰かが望んでいるのでしょうか。著者は、治らないけれど生きていかなくてはいけないがんの患者とともに歩きながら、医師は何をどうすべきかを問いかけます。こういう先生ばかりだったら「がん難民」などなくなるのに。
- ②児玉聡（京都大学文学研究科）「No. 21：ゲノム編集の倫理について考える」

『植物で未来をつくる—植物まるかじり叢書 5』（松永和紀、化学同人）※

- ①遺伝子組換え作物というと不安だという声を良く聞きますが、その技術のもつ可能性をもっとしてほしいという日本人研究者の声をインタビューした本です。植物科学を目指す若者に是非読んで頂きたいと思います。
- ②佐藤文彦（京都大学生命科学研）「No. 22：ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」

『セラミックバイオマテリアル バイオマテリアルシリーズ 3』(岡崎正之・山下仁大、コロナ社)

①日本を代表するセラミックス系生体材料の第一人者の面々が執筆している本書。この分野の骨子が目押しでおすすです。内容が専門的すぎてよくわからない方は、第1章「バイオマテリアルとは」と、各章に時折登場する「コーヒープレイク」という囲み記事だけでも是非ご一読いただきたいと思います。セラミックス系生体材料の科学が、単なるマニアックな知識の塊で構成されているのではなく、物語性を持った研究分野であることを感じさせてくれる一冊です。

②藪塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25: 骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『ヴィジュアルでわかるバイオマテリアル 新版 臨床工学ライブラリーシリーズ 5』(古園勉、岡田正弘、学研メディカル秀潤社)

①アパタイトセラミックス研究の第一人者である古園勉先生(近畿大学教授)と岡田正弘先生(現岡山大学准教授)の共著。両氏ともセラミックスが専門ですが、本書の内容は多岐にわたり、プラスチック系生体材料、セラミックス系生体材料、金属系生体材料のほぼすべてがカバーされています。実際の医療現場で使用されている生体材料が写真入りで数多く紹介されています。お医者さんがどのような道具を使って我々の身体を治してくれているのかを知ることができます。

②藪塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25: 骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『陸域生態系の炭素動態—地球環境へのシステムアプローチ』(及川武久 山本晋、京都大学学術出版会) ※

①森林などの陸域生態系の二酸化炭素吸収に関して、現地観測を基にきちんと評価する手法を説明し、実際に観測した成果が紹介されている。専門書であるが、気候変動と生態系のかかわりについて学びたい方にお薦めする。

②谷誠(京都大学農学研究所)「No. 29: 水と環境をまもる森の働き」

『流域環境評価と安定同位体—水循環から生態系まで』(永田俊 宮島利宏、京都大学学術出版会) ※

①水・炭素・窒素などの動きを調べ、それにかかわる生態系の役割を探るためには、安定同位体を用いることがたいへん重要になっている。専門書であるが、環境に関心を持つ方に学んでいただきたい。

②谷誠(京都大学農学研究所)「No. 29: 水と環境をまもる森の働き」

『元素戦略』(中山智弘、ダイヤモンド社)

①元素戦略プロジェクトのプログラムオフィサーが著した本で、「元素戦略」のねらいがわかるように書かれている。

②大石毅一郎(京都大学学際融合教育研究推進センター)「No. 33: 元素戦略プロジェクト」

『未来を拓く元素戦略—持続可能な社会を実現する化学』(日本化学会編、化学同人) ※

①この元素戦略プロジェクトも含めて、化学分野からの「元素戦略」へのさまざまなアプローチが紹介されている。

②大石毅一郎(京都大学学際融合教育研究推進センター)「No. 33: 元素戦略プロジェクト」

『岩波講座現代工学の基礎 2 材料特性と材料選択』(落合庄治郎、北條正樹、藤田静雄、伊藤靖彦、岩波書店) ※

①なし②大石毅一郎(京都大学学際融合教育研究推進センター)「No. 33: 元素戦略プロジェクト」

『ファインマン物理学 (1~5)』(リチャード・フィリップス・ファインマン ロバート・B. レートン マシュー・サズ、岩波書店) ※

①なんというか、「人間的」な物理の教科書だと感じています。物理を目指す人は読んで損は無いと一冊(セット?)です。

②増田亮(京都大学原子炉実験所)「No. 35: 放射線と原子核は使えよう」

『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』(串田秀也 好井裕明、世界思想社) ※

①「わたしたちって、どうやって他人を理解しているんだろう?」こうした気持ちに、人の内面ではなく、人が発する言葉や、使用する道具、人の見た目などの、外側に表れていて誰にでも利用できる対象を分析することで答えようとする学問の入門書です。気心の知れた恋人と会話をするときだって、わたしたちはさまざまな能力を駆使しているのです。その能力を知りたい方はぜひ本書を手にとってください! 出展メンバーの城より。

②水町衣里(京都大学物質—細胞統合システム拠点)「No. 37: いい対話ってどんな対話?」

『現代の事例から学ぶサイエンスコミュニケーション: 科学技術と社会とのかかわり、その課題とジレンマ』(ジョン・K. ギルバート スーザン・ストックルマイヤー 小川義和、慶応義塾大学出版会) ※

①サイエンスコミュニケーションについて学んでみたい、と思っている人にオススメです。国内で、サイエンスコミュニケーションに関わる多様な分野の研究者と一緒に、原著を翻訳し、この本をつくりました。ぜひ手にとってみてください。出展メンバーの加納より。

②水町衣里（京都大学物質—細胞統合システム拠点）「No. 37：いい対話ってどんな対話？」

『プログラミングの宝箱—アルゴリズムとデータ構造』（紀平拓男 春日伸弥、SBクリエイティブ）※

①マルチコアプロセッサの登場により、並列処理による高速化を評価する機会があり、基本的なアルゴリズムを見直す上で役立ちました。サンプルプログラムは、CとJavaで書かれており、インターネットからダウンロードができます。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『誰のためのデザイン？』（ドナルド・A. ノーマン 岡本明 安村通晃、新曜社）※

①ノーマン先生が来日されて講演をされた時、会場で購入し、ノーマン先生と握手をして、サインをいただいた記念品を持っています。認知科学者でもなく、ユーザインタフェースの研究者でもなく、「物づくり」における設計論として読むと面白いです。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『コンピュータと認知を理解する—人工知能の限界と新しい設計理念』（テリー・ウィノグラード フェルナンド・フロレス 平賀譲、産業図書）

①ロボットや人工知能を擬人化しすぎる風潮のある中で、その限界を正しく理解し、人間の道具として使えるような設計を考えさせてくれる本です。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『わかりやすいJava オブジェクト指向編』（川場隆、秀和システム）

①オブジェクト指向の特徴的なデータ構造とJava言語による操作が、一目瞭然で分かります。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『Javaのオブジェクト指向がゼッタイにわかる本—最初からそう教えてくれればいいのに！』（立山秀利、秀和システム）

①「おもちゃ屋の店主の日常」を例題に、オブジェクト指向らしい仕様変更を行いながら、頑強性のあるJavaプログラミングテクニックが学べます。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『JavaによるWebアプリケーション入門—サーブレット・JSP・Struts—』（中所武司・藤原克哉、サイエンス社）

①Webアプリケーションを作るための基本が学べます。例題で登場している「図書管理システム」のドメインオブジェクトは、アプリケーション開発におけるモデルを検証するにも役立ちます。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『アンナの道—HIVとともにタイに生きる』（直井里予、岩波書店）※

①北タイに生きる一人のHIV陽性者の女性とともに過ごし映画を制作した背景を綴りました。タイ人のしなやかな生きざまから学ぶことは多いです。

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『宦官—側近政治の構造』（三田村泰助、中央公論新社）※

①宦官とは、皇帝のプライベートに仕えるため、意図的に男性機能を喪失させられた人間の事です。皇帝の最も身近に控えていたため、歴史上何度も暗躍し、時には皇帝・皇后の廃立に関わり、国家滅亡の原因をつくることもありました。この本は、宦官が大きな影響力を持った漢・唐・明などの時代に特にスポットを当て、彼らがどのようにして巨大な権力を振るったのかをわかりやすく描いています。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『海のかなたのローマ帝国—古代ローマとブリテン島』（南川高志、岩波書店）※

①漢代とほぼ同時代にヨーロッパで繁栄していた帝国が、ローマ帝国です。本書は、ローマ帝国の辺境である現在のイギリスでローマ帝国がどのような統治を行ったのか、その統治の内実を鮮やかに、そして簡明に描き出しています。

また、考古学と歴史学との関係や、古代史と現在の歴史がいかに関係するのかという、興味のある地域や時代を問わず、歴史学という学問を考えてみる上で非常に重要な問いを投げかけてくれます。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『四川大地震（中国四川大地震の地震断層と被害写真集）』（林愛明 任治坤、近未来社）※

①四川大地震の震源断層と地震被害の状況・救助活動などをカラー写真で紹介しているので、今回のアカデミックデ
イ 2015 出展内容と密接に関連しています。

②林愛明（京都大学理学研究科）「No. 44：内陸巨大古地震による長江文明の滅亡」

『地震の化石—シュードタキライトの形成と保存』（林愛明、近未来社）※

①地震の発生証拠としての「地震の化石」—シュードタキライトを詳しく紹介しています。地震発生のメカニズムを
分かりやすく概説しています。

②林愛明（京都大学理学研究科）「No. 44：内陸巨大古地震による長江文明の滅亡」

『図解・超高層ビルのしくみ—建設から解体までの全技術』（鹿島建設株式会社、講談社）※

①超高層ビルのしくみについて、建物耐震設計の歴史から読み解いています。昭和初期の柔剛論争から、最新の制振
構造に至る幅広い内容を含んでいます。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『みんなが知りたい超高層ビルの秘密』（尾島俊雄・小林昌一・小林紳也、SBクリエイティブ）

①超高層ビルのしくみについて、構造安全性だけでなく、実際の施工方法や維持管理についてわかりやすく解説して
います。また、超高層ビルの高さの限界や地下の深さの限界など、興味深い内容についても触れています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『東京スカイツリーの科学—世界一高い自立式電波塔を建てる技術』（平塚桂・たかぎみ江、SBクリエイティブ）

①東京スカイツリーについて、「どうやって設計したか?」、「どうやって建てたか?」、「設備はどうなっているか?」
などについて、初心者向けにわかりやすく書かれています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『材料力学史』（ステファン・P. チモシェンコ 最上武雄 川口昌宏、鹿島出版会）※

①材料力学は、構造物を安全に設計する際の基礎をなす学問である。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ガリレオ・ガリレ
イから始まり、17世紀から20世紀に至る材料力学の歴史的発展を興味深く解説しています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『Improving the Earthquake Resilience of Buildings: The worst case approach』（I. Takewaki, A. Moustafa and K. Fujita, Springer）

①建物の地震に対するレジリエンスを向上させるための方法について解説した英語の本です。建物の地震に対するレ
ジリエンスについて論じた本は世界的にもめずらしく、世界各国の研究者に広く読まれています。この本は、2014年
の日本建築学会著作賞を受賞しています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『Critical Excitation Methods in Earthquake Engineering, Second Edition』（I. Takewaki, Elsevier）

①建物の最悪地震動について英語で解説しています。建物の最悪地震動に関する本は世界でもめずらしく、世界各国
の研究者に広く読まれています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『重力波をとらえる』（中村卓史 三尾典克 大橋正健、京都大学学術出版会）

①この本の出版後も様々な研究の発展があるが、重力波を（もうすぐ）とらえるためのバイブルとしていつもそばに
置いておきたい。

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『アフリカ学事典』（日本アフリカ学会 編、昭和堂）※

①アフリカに関する辞典ではなく、アフリカ研究に関する辞典です。一読すれば、アフリカ研究がいかに多様である
か理解できると思います。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『アフリカから学ぶ』（峯陽一 武内進一 笹岡雄一、有斐閣）※

①内容は少し専門的ですが、執筆者たちの現場感覚を活かした作りになっており、「アフリカから」学ぶというタイトルがそれを端的に表現しています。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『人物で語る物理学（下）』（米沢富美子、岩波書店）

①アリストテレスの時代からの物理学の歴史を、その発展に貢献してきた人物にスポットを当てて紹介している。自分の勉強している分野がかくも多くの人びとのドラマの上に成り立っていることを思うと感動を禁じ得ない。

②宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 51：産学連携の原形」

『研究を深める5つの問いー「科学」の転換期における研究者思考』（宮野公樹、講談社）

①アマゾンで悪評なのに京大ルネでは毎月売り上げ上位ランクイン？一度、自分の目で判断してみようか？

②宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 51：産学連携の原形」

『真理から存在へー〈真にするもの〉の形而上学』（秋葉剛史、春秋社）※

①真理と存在との関係について、「形而上学的説明」というアイデアに基づいて論じた本です。著者の博士論文をベースにした本格的な研究書ですが、論述はたいへん丁寧かつ明瞭で、非専門家にも広くおすすめできます。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明ー現代形而上学の観点から」

『穴と境界ー存在論的探究 現代哲学への招待 Japanese Philosophers』（加地大介、春秋社）

①「説明」概念と密接な関係にある「依存」を鍵概念のひとつとして、穴と境界の存在について論じた本です。身近でありながらも奇妙な性格をもつこうした「ものもどき」の本性に一步一步迫るきわめて緻密な議論が展開されています。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明ー現代形而上学の観点から」

『アリストテレス的現代形而上学 現代哲学への招待 Anthology』（トゥオマス・タフコ（編・著）、加地大介・鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・植村玄輝・北村直彰（共訳）、春秋社）※

①「説明」「依存」「本質」といった概念を重要視する「アリストテレス的形而上学」という流派の論文を集めた本です。アリストテレスの形而上学観を現代に蘇らせようとするプロジェクトの最先端を知ることができます。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明ー現代形而上学の観点から」

『ジェイムズ・パーキンソンの人と業績』（豊倉康夫、診断と治療社）

①パーキンソン病はおよそ200年前にパーキンソンによって記載されました。当時の医学は現在のものと随分異なりますが、パーキンソンの細部に渡る観察眼に驚かされると共に、神経学の成り立ちを知ることができる一冊です。

②上村紀仁（京都大学医学研究科）「No. 53：パーキンソン病をモデルする」

『シリーズ21世紀の動物科学 9ー動物の感覚とリズム』（浅島誠 日本動物学会 七田芳則、培風館）※

①動物の光受容機構に関する生物系学部生向けの参考書

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『見える光、見えない光：動物と光のかかわり（動物の多様な生き方1）』（寺北明久 蟻川謙太郎、共立出版）※

①動物が眼だけでなく多様な組織で光を感じ、いろいろな情報を得ていることについて、最近の研究成果を含めて概説

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『George Cardona, Pāṇini: His Work and its Traditions. Volume One. Background and Introduction. Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged, 1997.』

①紀元前500-400年頃の文法家パーニニが残したサンスクリット文典と彼の文法体系について詳説する名著です。驚くべきことに、全763頁という分量にして未だ「第一巻」であり、第八巻までの刊行が予定されています。パーニニ文法学の専門的知識を求める方にお勧めします。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海ー美の探訪」

『偶然の宇宙ー双書現代の哲学』（伊藤邦武、岩波書店）※

①わたしの学生時代の先生が書いた本です。「わたしたちが存在するこの宇宙は、偶然の産物なのか？」という深遠す

ぎる問いについて論じています。とはいえ、それに答えを出すことよりは、この問いを前にして立ちすくむ人間の姿を描こうとした作品だと思っています。読んでたやすく理解できるような代物ではないですが、哲学という学問の深みを味わいたければおすすめです。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『生まれながらのサイボーグー心・テクノロジー・知能の未来』（アンディ・クラーク 呉羽真 久木田水生、春秋社）

※

①わたしが訳した本です。認知科学・認知技術の話題と哲学の手法をベースに、「人間は生まれながらのサイボーグだ」という驚きの主張を展開する、野心的な本です。原書で読んであまりにも面白かったので、翻訳するだけでなく、博士論文のテーマにもしました。最終的に著者の主張には反対することになったのですが、やっぱり強い思い入れがあります。買ってください。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『なつかしさを心理学：思い出と感情』（楠見 孝、誠信書房）※

①なつかしさを心理学から解明した本邦初の本です。専門外でもわかりやすいように書きました。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさを心理学：思い出ときづな」

『サブリミナル・マインド：潜在的人間観のゆくえ』（下條信輔、中央公論新社）※

①なつかしさを心理学から解明した本邦初の本です。専門外でもわかりやすいように書きました。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさを心理学：思い出ときづな」

『コンピューターはいい化学者』（西村肇、東京化学同人）

①やや古いが、計算化学を平易に解説する。

②諸熊奎治（京都大学）「No. 63：コンピュータで化学反応の世界を探索」

『最新脳科学で読み解く脳のしくみ』（サンドラ・アーモット サム・ワン 三橋智子、東洋経済新報社）※

①脳科学に関する本は巷に溢れていますが、脳の研究者からすると眉をひそめるようなものも少なくありません。この本では、脳研究の世界的な権威である雑誌「ネイチャー・ニューロサイエンス」の元編集長らが、「正しい」脳研究の成果を、一般の読者向けにできるだけ面白く、わかりやすく紹介しています。

②水原啓暁（京都大学情報学研究科）「No. 66：リズムでつながる脳」

『脳科学がビジネスを変える ニューロイノベーションへの挑戦』（萩原一平、日本経済新聞出版社）※

①脳の研究をしていると、よく「何の役に立つの？」と尋ねられます。この本では脳科学研究の産業応用を、農業革命、産業革命、IT革命に次ぐ第四の経済革命と位置づけ、脳研究のビジネスへの展開の可能性を示しています。脳科学研究の成果を活用するためのヒントになるかもしれません。

②水原啓暁（京都大学情報学研究科）「No. 66：リズムでつながる脳」

『日本被害地震総覧 599-2012』（宇佐美龍夫（著）、石井寿（著）、今村隆正（著）、武村雅之（著）、松浦律子（著）、東京大学出版会）※

①およそ 1400 年にわたる日本の被害地震のカタログ。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

『The Orphan Tsunami of 1700—Japanese Clues to a Parent Earthquake in North America』（Atwater）

①英語、日本語、くずし字、地質学、地震学、歴史学が入りまじったおもしろい報告書。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

山極総長の推薦図書

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

コメント

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『ゴリラとピグミーの森』（伊谷純一郎著、岩波文庫）※

アフリカ独立の都市と呼ばれる1960年、単身アフリカに渡り、小さなルノーを駆って原野を走り、ゴリラの森に分け入る。そのうち、森の民ピグミーの人々に魅せられ、彼らの文化と生態を調査するようになる。フィールドワークの野心と魅力が豊富に詰まっていた。

『ゴリラの季節』（ジョージ・シャラー著、早川書房）※

マウンテンゴリラのすむ赤道アフリカの高地ミケノ山の中腹に夫婦で露營し、ひたすらゴリラの跡を追跡する毎日。次第に明らかになってくるゴリラの生態、思いがけない発見、とりわけゴリラの中に人間に似た心を感じる記述がすばらしい。

『森の隣人』（ジェーン・グドール著、平凡社）※

タンガニカ湖畔に母親と一緒に住み始めて、未知の野生チンパンジーの生態解明に挑む。日本の霊長類学者が試みた、一頭一頭の個体に名前を付ける個体識別法を駆使して、チンパンジーと心の触れ合う間柄となる。個性あふれるチンパンジーの描写がすばらしい。

【今ハマっている本（誰かとこの本について話したい）】

『モラルの起源』（クリストファー・ボーム著、白揚社）※

動物の中で人間だけが顔を赤らめるという生理現象を持つことから出発し、恥と罰をどのように内面化させながら人類は社会を作ってきたか、を類人猿と比較しながら解き明かした野心作。文化人類学者である著者がチンパンジーの調査をして得た考察は進化をたどる上で説得力がある。

『新世界ザル（上・下）』（伊沢紘生著、東京大学出版会）※

日本霊長類学のパイオニアである著者が30年余りにわたって通い続けたアマゾンの熱帯雨林。そこにすむ多様なサルたちを通して知った「種の誇り」がひしひしと伝わってくる。自然の原理ともされている「競争」についても現場の観察から再考を迫る。動物から学ぶこととはこういうことなのだと教えてくれる本だと思う。

【若者にお勧めしたい本】

『京都の平熱』（鷺田清一、講談社）※

哲学者である著者が生まれ育った町の京都を散策しながら、自身の体験と歴史、思想の交錯をさらりと書き綴ったエッセイ。京都がこんな風にできているのか、と改めて目を見張られる。

『続・百年の愚行』（小崎哲哉編著、紀伊国屋書店）

戦争、差別、暴力、貧困、メディア、環境、エネルギーなど現代を取り巻く諸問題を「愚行」という視点からまとめた。人間のもつ果てしない欲望と想像力を、どのような世界観、地球観に帰結させえるか。もはや地球も宇宙ですら無限ではない。アーティストである著者がまとめた写真も見ごたえがある。巻末の「愚行」について考える文献リストをぜひご参照あれ。

『カナリー・ロウ』（ジョン・スタインベック著、福武文庫）

カリフォルニア州に実在したイワシの缶詰工場のが並ぶ横丁で、人々の日常を描いた小説。主人公は中年の生物学者で、彼を取り巻く人々の関係とドタバタ劇がとても面白い。人間って、人のために良かれと思ってやったことがとんでもない方向へと発展してしまうことがよくあるよなあ。人が集まるとろくでもないことが起こる、と覚悟しておいたほうがいい。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『暴力はどこから来たか』(山極寿一著、NHKブックス)

集団的自衛権が議論になる今、集団間の暴力に関してその起源にさかのぼって考えてみるのが問われている。人間はそもそも暴力的な動物として進化したのか、それとも別の目的のために発達した能力を近年暴力として発揮するようになったのか。政治家は前者の解釈を好むが、先史人類学や霊長類学の証拠は後者が真実だと主張する。そこには人間の社会性の不思議な進化の歴史が埋め込まれている。

『闇の奥』(ジョゼフ・コンラッド、岩波文庫) ※

今でこそ、アフリカの奥地のジャングルはテレビでも紹介され、気安く行けるところだという錯覚がある。しかし、つい最近までそこは普通の人々が入れない暗黒の世界だと思われていたし、一度足を踏み入れたものは正気では帰ってこないとされていた。この本は20世紀の初頭に書かれ、当時の欧米の暗黒大陸のイメージがそのまま表現されている。多くは間違っているのだが、私は時々そこにいくつか重要な真実が眠っていると思うことがある。

『共感の時代へ』(フランス・ドゥ・ヴァール著、紀伊国屋書店) ※

アメリカのヤーキス研究所で、チンパンジー、ボノボ、オマキザル、カニクイザルなどの行動研究をしてきた著者が、人間に特に発達していると考えられる共感能力の進化を広く動物一般に比較しながら論じた本。具体例が豊富で、人間の行動のどれをとっても人間だけが優れているとはいえないことがわかる。この世界は同調という種を超えて通じる相互作用に満ちており、それを正しく理解することが重要だとわかる。われわれ人間ははたして共感能力を十分に使って生きているだろうか。

問合せ 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学学術研究支援室
Tel : 075-753-5113
E-mail shirai@kura.kyoto-u.ac.jp